

## シンポジウム I: それぞれの主張、臨床検査学教育の可能性を探る

## 1. 司会の言葉

戸 塚 実\*

医師、歯科医師、薬剤師を除く他の医療関連技術者の養成教育には3年制教育と4年制教育が存在する。臨床検査技師養成施設も然りである。国家資格である臨床検査技師資格を有する医療従事者を養成することが唯一の目的ではないことは確かである。3年制卒業で取得できる臨床検査技師国家試験受験資格を4年で取ることを目指す学生にプラスαの思いがあるのは当然であるし、プラスαがないのであれば4年制教育の意義はない。

医療の劇的な進歩が、臨床検査の世界にも及んでいるのは周知の事実であり、より高度な知識と技術が要求されている。それだけではなく、臨床検査技術学の発展的継承に臨床検査技師が中心的役割を担う必然性を考えると、その基盤作りを着実に進行しなければならない。すなわち、さらに質を高めると共に、臨床検査に関わる広い領域に人材を輩出していくことが求められる。養成施設の基本は教育と研究だと思われるが、教育や研究にも当然のことながら多様性があり、各校が目指す育成すべき人材に即した教育・研究を実践していくべきであろう。唯一、共通であるべきことは、いずれの養成校も臨床検査技師としての最低限の教育がなされていることである。国家試験がそれを担保するという考えもあろうが、養成校が国家試験予備校でないことを考えると、それはいかなるものかとも

思われる。さりとて、臨床検査技師の多方面での活躍を可能にする多様性を摘み取るような、ハードルの高いコアカリキュラムの策定も望まれない。

このような状況の中、本シンポジウム「それぞれの主張、臨床検査学教育の可能性を探るー短大・専門学校・大学(私立・国立)の果たす役割と連携そして企業ニーズー」では、企業の立場から、専門学校の立場から、4年制大学の立場から、短大の立場から、そしてまとめとして臨床検査技師教育の課題について、5名の先生方からご講演をいただいた。

企業の立場からは、特定領域の話題であることを前提とされたうえで、臨床検査技師が活躍している状況を報告していただき、これからもニーズが高まっていくであろうことが示唆された。専門学校の立場からは、医療人としての感性を備えた臨床検査技師の育成が重要であることを指摘され、それを中心になって担っているのが専門学校ではなかろうかという点について、自負と誇りをもって報告がされた。4年制大学の立場からは、研究開発マインドを持つ指導の高度医療人の育成を目指しているという報告がされた。すなわち、学部教育のみでなく大学院教育に力を注ぐとともに、それらの学生のキャリアパスと経済的支援を充実し、優秀な PhD 取得者を社会に輩出することを目指していることが

\*東京医科歯科大学 mtozuka.alc@tmd.ac.jp

述べられた。短大の立場からは、地域の身近な高等教育機関として専門教育を提供することの重要性が語られた。育成人材の目標は臨床検査の専門家であるのは当然として、人格形成と将来を見据える力、スキルアップを実現する持続力を養う教育の重要性について報告された。まとめとしては、指定規則やガイドラインの改定、さらには受験資格の見直しの時期に来ていることが述べられた。そして、知識と技術を修得する教育にとどまらず、今まで以上に医療人としての人格、理解力、分析力、判断力、決断力等を備えた高度専門職業人の養成が必要であることが示唆された。

いずれの報告者も情熱を持って人材を育成することに日々努力されていることが伺えたが、その育成人材像に多様性があることは明らかで

ある。教育協議会に加盟する 86 校のそれぞれが、同様に各校の育成人材像を明確にして日々の教育研究活動に邁進されているものとする。至極当然のことであり、健全なことでもあると思うし、多様性を実現できる環境にあると思う。しかし、筆者が最後にここで提起しなければならないと考えるのは、コア教育の問題である。教育の多様性は臨床検査技術学の広範囲な躍進には不可欠であると思うが、コア教育には共通性が求められる。「コア教育を犠牲にしない多様性」を、「多様性を犠牲にしないコア教育」を、私たちで作り上げていくことが望まれる。そしてこれらは私たち教育者のためではなく、臨床検査を志す現在そして未来の学生と日本国民のために！